

平成29年1月25日(水)

老球の細道301号

もう一息

会津バスケットボール協会 室井 富仁

大相撲初場所で初優勝した大関稀勢の里が72代横綱となった。日本出身力士の横綱は、1998年夏場所で昇進した若乃花以来19年ぶり。野球出身の稀勢の里は角界を選び、十両昇進、新入幕とも歴代2位の若さで、まさに名前の通り稀有の勢いで出世したが、その後足踏み状態が続いた。なんと新入幕から初優勝まで73場所かかり、史上2番目に遅い記録だという。よくあきらめないで辛抱したものだ。

当初は貴乃花に次ぐ史上2番目の出世街道を走っていたのが、いつの間にかブレーキがかかり同世代の力士たちに抜かれるようになってしまった。自分は何をやっているのか、周囲の期待に答えられない情けなさに何度も泣いた。横綱白鵬からも「強い人は大関になる。宿命のある人が横綱になる。彼には何か足りない」と酷評され悔しい思いもした。

バスケットボールにおいても努力を重ねても何もかもうまくいかないときがある。一方で同世代や仲間たちが、さほど努力もせず次々とチャンスを手にし、先へ走り去ってしまうこともある。そんな時いつも思い出す詩がある。

「もう一息

もう一息というところでくたばっては

何事もものにならない

もう一息

それをもう一息

それに打ち克つてもう一息。

もうだめだ

それはもう一息

勝利は大変だ

だがもう一息」

この詩は、学生時代に読んだ高野悦子著『二十歳の原点』という本の中で見つけた。著者はかつてのバスケットボール名門栃木女子高校バスケットボール部員だったと記憶している。詩の作者は明治から昭和にかけて活躍した作家武者小路実篤である。

この詩の中に表現されている「勝利」はスポーツのみならず色々なことに置きかえられる。自分の崇高な目標を達成することは簡単なことではない。立ち足かかる高い壁の前で何度も挫折を味わわれる。それでもあきらめることなく、ドンキホーテのごとく挑み続けながら目標達成を目指す警鐘のメッセージとして受け取ることができる。

小説家にとっての「勝利」というのは小説を書き上げること。書き上げる途中でアイデアが枯れてきて「もうだめだ」とあきらめの気持ちがわいてくるのだろうか。バスケットボールの戦いも「勝てる」という状態を何度もひっくり返されて負け続けると、今までの努力が無となり「もうだめだ」の絶望感に苛まれる。だが、ここから真価が問われる。

元横綱審議委員の作家内館牧子さんは稀勢の里に心の中でエールを送っていたという。「何台ものバスに乗り遅れてようと飛行機があるわ。飛行機が来た時、乗り遅れないように準備をしよう。そうよ、飛行機なら乗り遅れたバスより速く、目的地に着くわ」